

看護実践研究センター報告書

平成27年度

目 次

I	はじめに	113
II	平成27年度事業報告	
1.	なごや看護生涯学習セミナー	113
	【看護研究セミナー】	
	(1)看護研究いろはの「い」	
	(2)看護研究いろはの「ろ」	
	(3)看護研究いろはの「は」	
	【看護実践セミナー】	
	(4)チーム医療の質を向上させるノンテクニカルスキル	
	(5)臨床に役立つ呼吸モニターの見方・読み方	
	(6)患者急変対応「何か変、と思ったとき…」	
2.	なごや看護生涯学習公開講演会	118
3.	地域連携セミナー	119
4.	昭和生涯学習センター共催講座	120
5.	看護研究サポート	121
III	今後の課題	122

名古屋市立大学看護学部
名古屋市立大学病院看護部

平成27年度看護実践研究センター運営委員会

センター長：明石 恵子（名古屋市立大学看護学部）

運 営 委 員：安東由佳子（名古屋市立大学看護学部）

金子さゆり（名古屋市立大学看護学部）

友廣 智香（名古屋市立大学病院看護部）

水野千枝子（名古屋市立大学病院看護部）

宮城 純子（名古屋市立大学看護学部）

山口 孝子（名古屋市立大学看護学部）

脇本 寛子（名古屋市立大学看護学部）

原沢 優子（名古屋市立大学看護学部）

事 務 職 員：松原 裕子

名古屋市立大学看護学部看護実践研究センター

〒467-8601

名古屋市瑞穂区瑞穂町字川澄 1 番地

TEL & FAX：0 5 2（8 5 3）8 0 4 2

<http://www.nagoya-cu.ac.jp/nurse/center/>

I はじめに

名古屋市立大学看護学部は、平成18年度に看護職者を対象とする地域貢献事業を開始し、本年度は10年目となる。当初、看護学部地域貢献委員会が地域貢献事業を企画・運営していたが、看護職者のニーズを把握するため、平成19年度に名古屋市立大学病院看護部に協力を求めた。その後、事業の拡充と研究の推進を視野に入れた看護実践研究センター（以下、本センター）が平成24年度に設置され、翌25年度からは、看護学部教員と看護部看護師を構成メンバーとする看護実践研究センター運営委員会が地域貢献事業を企画・運営している。

地域貢献事業は、開始当初は「なごや看護生涯学習セミナー」3件のみであったが、本年度の同セミナーは6件に増えている。また、平成19年度に「看護研究サポート」と「なごや看護生涯学習公開講演会」、平成25年度に「地域連携セミナー」を開始し、市民の方々や保健医療福祉専門職者との議論の場ともなっている。さらに、昭和生涯学習センターとの連携による共催講座も開催し、地域貢献事業は年々充実しつつある。

本報告書では、本年度の地域貢献事業の実績を報告するとともに、次の10年に向けた新たな課題を述べる。

II 平成27年度事業報告

1. なごや看護生涯学習セミナー

担当：安東由佳子、脇本寛子、水野千枝子

「なごや看護生涯学習セミナー」は、愛知県内の保健医療職者の専門性を高める機会を提供することで、地域住民・名古屋市民へのサービス向上につながることを期待した事業である。本年度は、看護研究セミナー3件、看護実践セミナー3件を開催した。

1) 事業実施の経緯

時期	内 容
4月	4/14 セミナー開催の検討 4/28 テーマおよびセミナー担当者の募集
5月	5/19 セミナー担当者と内容の決定、セミナー日程の調整 参加申込方法（ネット申込、FAX申込）、受講証明書の検討
6月	6/16 募集人数、受講料、参加申込締切日、チラシ（内容、配布先、配布枚数、印刷枚数）、受講カードの検討
7月	7/10 名古屋市内の病院、愛知県内の保健所など141箇所にチラシを発送 7/13 看護実践研究センターホームページで告

時期	内 容
7月	知開始 7/21 アンケート、セミナー実施日の役割分担の検討
8月	参加受付対応 8/6 参加申込締切 8/11 受講カードの発送（メール、FAX） 8/26 領収書発行手続きを事務に依頼
9月	セミナー実施前に受講者リスト作成、講師への連絡 配布資料とアンケートの印刷 セミナー終了後は、アンケートを集計し委員会にて随時報告 随時、看護実践研究センターホームページへの開催報告掲載 ・看護研究いろはの「い」開催（9/3、9/10） ・チーム医療の質を向上させるノンテクニカルスキル開催（9/12） ・看護研究いろはの「ろ」開催（9/19） ・看護研究いろはの「は」開催（9/29、10/6）
10月	・臨床に役立つ呼吸モニターの見方・読み方開催（10/16、10/30、11/13）
11月	・患者急変対応「何か変、と思ったとき…」開催（11/15）

2) 事業の実施状況

【看護研究セミナー】

(1) 看護研究いろはの「い」

講 師：門間晶子（名古屋市立大学看護学部・教授）
日 時：平成27年9月3日（木）・9月10日（木）、
18：30～20：30

場 所：名古屋市立大学看護学部410講義室
募集人数：30名

参 加 者：9月3日（木）14名、9月10日（木）9名
参 加 費：2,000円

〈内 容〉

今年度は、1回あたり2時間の講義を1週間間隔で2日間実施した。事前に受講者に案内されていた内容に関して到達目標を5点定め（①看護研究の要素や進め方に関する基本的事項の理解、②日常の実践における疑問の文章化、研究疑問としての表現、③研究論文を読み、文献を検討する際の視点や考え方の理解、④文献検討の意義と基本的な方法の理解、⑤研究計画書の構成と要素についての理解）、これらに沿って講義やグループワークを行った。手元資料の流れに沿ったパワーポイント資料を提示しながら進めた。

1日目には、まず看護研究とは何かについて、多数の「看護研究」の存在、看護研究の定義・特徴・役割等を解説し、次に、研究疑問（リサーチ・クエスチョン）と

は何か、それを洗練するヒント、研究デザインとの関連について伝えた。続いて、問題意識の明確化から論文の公表に至る研究のプロセスの全体像を解説し、その最初のステップを丁寧に踏むことの大切さを伝えた。具体的には二人一組になってもらい、ワークシートを用いながら、「受講者が疑問をもった看護現象」、「問題だと感じている状況」を書き出してもらい、それらを研究疑問の形で記述するにはどうしたらよいかを話し合ってもらった。また、次回の資料として論文2点（量的研究・質的研究）を配付し、参考資料として文献クリティークのガイドラインを添付した。

2日目には、看護研究を読み・味わい・そこから学ぶために、2件の研究論文を読んで意見交換を行った。その後論文の種類、種別による査読基準の違いなどを解説し、学習につながりやすい論文を探すヒントにもつなげた。続いて文献検討・文献レビューに関する用語の定義、文献検討の目的、文献検索方法、絞込みのポイント、文献検討結果のまとめ方について解説した。前回の続きとして、リサーチ・クエスチョンを洗練させるためのグループワークを行った。最後に、研究計画書について、その役割、要素、作成例について説明した。特に量的な研究では、研究方法や扱いたい事象を明確にするために、概念枠組みを描くことを勧めた。

本セミナーでは、過去の資料等を参照し、看護研究の基本的事項をおさえ、理解を促しながらも、現場の中での疑問をおそらく持ってきているであろうことを想定し（実際過半数の受講者がそうであった）、研究を少しでも進めるための「リサーチ・クエスチョン」を演習として取り上げた。次の段階の「いろはの『ろ』」の受講希望者も多く、連続性の観点から、研究計画書がある程度できていた方が望ましいと思われた。しかし、2日間ですこまで到達するのは難しいと考えていたため、研究計画書については解説と例示のみとした。



〈アンケート結果〉

2回目の参加者9名全員から回答があった（回収率100%）。セミナーは「職場の上司から勧められて」参加した者が7名（77.8%）と最も多かった。また、セミナーの内容は「わかりやすかった」「どちらかといえばわかりやすかった」と回答した者が8名（88.9%）、「今後の仕事に活かすことができる」と回答した者が8名（88.9%）であった。自由記載でも「研究疑問を抽出することが大変で、セミナーを受講し良い意味で、考え直す機会になりました。もう一度テーマを選定し直そうと思います」等、研究に初めて取り組む看護職にとって有意義なセミナーとなった。

(2) 看護研究いろはの「ろ」

講師：金子典代（名古屋市立大学看護学部・准教授）

日時：平成27年9月19日（土）、9：30～16：30

場所：名古屋市立大学看護学部401情報処理室

募集人数：20名

参加者：20名

参加費：3,000円

〈内 容〉

今年は「看護研究いろはの『ろ』」を開講し、量的研究を行う際のサンプリング、データ収集、入力のプロセス、SPSSを用いた統計分析に関する講習を行った。午前、午後の1日をかけてのプログラムとし、前半の午前の部では、量的研究を行うにあたって基本となる内容、1）基本的な統計量の考え方、2）調査を実施するプロセス、午後はデータ入力、SPSSを用いたデータ分析、基礎統計、単純集計、2項目の質的変数間の関係を見る分析、量的変数間の関係を見る分析に関する講義を行った。対象者のデータ分析経験は様々であることが考えられたため、色々なレベルに対応できるように内容を工夫した。概要は以下の通りである。

1）基本的な統計量の考え方

(1) 標本サンプリングが研究結果に及ぼす影響

量的調査を行うにあたって、調査集団のとらえ方、調査対象者の選定、調査対象者数、回収率の意味、回収率に及ぼす要因、調査を実施するにあたっての留意点などを説明した。

(2) 基本統計量

数量データの取り扱いとして、平均値、標準偏差、中央値、最頻値、度数分布、正規分布、棄却限界法、「ばらつき」が発生する原因などについて、例を用いて説明した。また、名義尺度、順序尺度、間隔尺度、比率尺度を解説した。

(3) 調査を実施するプロセス（エクセルを用いた事例データによる演習）



この時間では、質問紙調査を想定し、その手順にあわせて、対象集団にアクセスする方法、対象者の参加率の予測、調査項目の作成、分析・解析方法の検討、依頼状の作成、パイロット調査などを取り上げて説明した。次いで、調査実施、データ収集、分析のプロセスについて、特に調査票の回収とデータ・クリーニング、データ・コーディング（コーディングマニュアルの作成）、データのダブルエントリーと入力ミスを発見する方法について、あらかじめ用意したエクセル・データを用いて演習した。

(4)SPSSを用いたデータ分析、統計手法

SPSSを使用して実施できる量的データの分析手法の説明を行った。事前に準備した模擬データを用いて、SPSSにより基礎統計量の算出、平均値の算出、群別の平均値の算出などを行った。またカイ二乗検定、t検定などの説明も行い、SPSSソフトウェアを使用する際にはどの数値を参考にすべきか、注意点の説明も行った。各自のコンピューターソフトウェアへの習熟度を見ながら個別対応しつつ行った。データの分析方法は多くあり、ソフトウェアにより簡便に実施できるようになってきているが、研究のデザイン、得るデータにより用いる分析手法がまったく異なるため、研究計画の洗練に時間をかける必要性についても解説した。

〈アンケート結果〉

参加者20名全員から回答があった（回収率100％）。セミナーは「職場の上司から勧められて」参加した者が12名（60％）と最も多く、参加動機は「新しい知識を得る」が8名（40％）と最も多かった。また、セミナーの内容は「わかりやすかった」「どちらかといえばわかりやすかった」と回答した者が13名（65％）、「今後の仕事に活かすことができる」と回答した者が20名（100％）であった。自由記載でも「どちらかといえば、職場で研究を強制されている立場にあり、困った末の参加である」「難しかったけど、ちょっと興味がわきました」等、看護職

のニーズに合致した役に立つセミナーとなった。

(3)看護研究いろはの「は」

講 師：金子典代（名古屋市立大学看護学部・准教授）

日 時：平成27年9月29日（火）・10月6日（火）、
18：30～20：30

場 所：名古屋市立大学看護学部402講義室

募集人数：15名

参 加 者：9月29日（火）10名、10月6日（火）11名

参 加 費：2,000円

〈内 容〉

今年度は、行動理論を用いた集団・個人の健康行動の分析、健康教育やヘルスプロモーションへの活用の実践を学ぶことを目的とするセミナーを「看護研究いろはの『は』」として2回に分けて実施した。夜間に開講したことで、臨床現場で勤務する看護師も参加可能となったようであった。概要は下記の通りである。

第1回は、参加者のバックグラウンドやニーズも様々であることを考慮し、ヘルスプロモーション、行動理論の基礎、行動理論が重視されるようになった背景について説明した。また代表的な行動理論である保健行動理論、自己効力理論、エコロジカルモデル、変化ステージ理論、計画的行動理論、ローカスオブコントロール理論、について説明した。理論が生まれた背景、各理論の主要コンセプトの説明、実際の患者教育、その内容の評価に理論をどう活用するかも実例をもとに説明した。

第2回では、第1回の復習を行ったあと、ストレス理論、ソーシャルサポート理論を説明した。また特に対象への行動変容をいかに効果的に行うか、ということに焦点を当て、行動理論のみならず近接した学問体系である認知行動療法、カウンセリングについても活用できる概念を紹介し、実際の患者ケア、行動変容支援に活用する方法を解説した。また疾病構造の変化、慢性疾患患者の増加により、病院患者の多くが生活習慣改善や行動変容を必要としている。参加者からも対応が難しい患者の実



例を紹介してもらい、どのようなアドバイスがあれば行動変容が可能となるかを講師、参加者間で考える取り組みも行った。

〈アンケート結果〉

2回目の参加者11名全員から回答があった（回収率100%）。セミナーは「職場の上司から勧められて」参加した者が8名（72.7%）と最も多かった。また、セミナーの内容は、11名全員が「わかりやすかった」、「今後の仕事に活かすことができる」と回答した。自由記載でも「看護・臨床の場で使ってみたいと思うことや、実際になんとか行っていたことがより明確化できるきっかけになりました。より詳しく知りたいと思いました」等の記載があり、患者の行動変容への支援に難しさを感じている看護職にとって、有用な知識や考え方を身につけることができた有意義なセミナーとなった。

【看護実践セミナー】

(4) チーム医療の質を向上させるノンテクニカルスキル

講師：金子さゆり（名古屋市立大学看護学部・准教授）

日時：平成27年9月12日（土）、9：30～16：00

場所：名古屋市立大学看護学部402講義室

募集人数：20名

参加者：9名

参加費：3,000円

〈内 容〉

近年、医療現場では“ノンテクニカルスキル”を身に付けることによって、臨床を実践するための知識や技能である“テクニカルスキル”を補完し、臨床現場におけるヒューマンエラーの回避やチームパフォーマンスの向上が期待されている。本セミナーでは、チーム医療に必要とされるノンテクニカルスキル（おもにチームワーク、リーダーシップ、状況モニタリング、相互支援、コミュニケーション）について講義だけでなく演習を交えながら理解を深めた。

まず初めに、ノンテクニカルスキルの概要を説明し、DVDをみながら医療安全の推進には必要不可欠なスキルであることを再確認したうえで、WHOガイドラインやAHRQ（Agency for Healthcare Research and Quality）が開発したTeamSTEPPSを概説した。そして、TeamSTEPPSのフレームワークにそって、チームワーク、リーダーシップ、状況モニタリング、相互支援、コミュニケーションの順で進めていった。

「チームワーク」では、与えられたタスクに対し条件が制限されるほどリーダーシップ、状況観察、コミュニケーションの重要性が増すことを演習を通して理解してもらった。また、グループとチームの違い、チームとして機能するために必要な事など誤解の多い部分について



も概説した。「リーダーシップ」では、リーダーとマネージャーの違い、リーダーの責務、リーダーシップの発揮方法（ブリーフィング：ブリーフ・ハドル・デブリーフ）、フォロワーシップについて概説し、緊急入院の受け入れの場面を想定して各グループでブリーフィングを実演してもらった。チームワークを進める際にメンタルモデルを共有することが作業の効率を高め、チームの達成感を増すことをグループワークを通して確認した。そして「状況モニタリング」や「コミュニケーション」では、観察した情報をいかに正しく認知し、正しく伝達することができるかについて、ヒューマンファクターの観点から具体例を示しながら理解を深めた。さらに、対立を解決するための方法（DESC法）やバックアップ方法などの「相互支援」についても概説した。

最後に、今回の学びを今後に生かすための方策について参加者でディスカッションを行った。

〈アンケート結果〉

参加者9名全員から回答があった（回収率100%）。セミナーを知ったきっかけは「チラシ」が6名（66.7%）と最も多く、参加動機は「自分自身のレベル・アップ」が6名（66.7%）と最も多かった。また、セミナーの内容は、9名全員が「わかりやすかった」、「今後の仕事に活かすことができる」と回答した。自由記載でも「今日学んだことのうち、できそうなところからやっていきたい。職場の皆にもセミナーを受けてもらいたかったです。そうすれば職場も変われると思います」等の記載があり、明日からの業務へ活かすことができる有意義なセミナーとなった。

(5) 臨床に役立つ呼吸モニターの見方・読み方

講師：薊隆文（名古屋市立大学看護学部・教授）

日時：平成27年10月16日（金）・10月30日（金）・

11月13日（金） 18：30～20：30

場所：名古屋市立大学看護学部410講義室

募集人数：30名

参加者：10月16日(金) 9名、10月30日(金) 8名、
11月13日(金) 7名

参加費：3,000円

〈内 容〉

1回目：(SpO₂、PETCO₂を理解するための) 血液ガス
検査の見方・読み方

パルスオキシメータ・カプノメータなど使用が簡単で、有用性の高いモニターを臨床現場で十分に生かすためには、SpO₂とPaO₂、あるいはPETCO₂とPaCO₂の関係を理解しておく必要がある。そこで初回は、PaO₂、PaCO₂などの血液ガス検査の見方・読み方の基本を復習し、陥りやすい判断の間違いについて説明した。

2回目：パルスオキシメータとカプノメータの見方・読み方

初回の血液ガス検査との関係を振り返りながら、パルスオキシメータによるSpO₂、カプノメータによるPETCO₂の数値の意味、その数値の表す病態について説明した。



3回目：患者管理を酸素運搬から考えるためのその他の
モニターの見方・読み方

呼吸・循環の管理は一言でいえば「酸素の運搬」の管理である。この酸素の運搬にパルスオキシメータ・カプノメータがどのように関係しているのかを説明した。これらのモニターとその他のモニターも合わせて、呼吸と循環の相互関係がどのようにモニターの値に影響するのかを説明した。

〈アンケート結果〉

2回目の参加者7名全員から回答があった(回収率100%)。セミナーを知ったきっかけは「チラシ」が4名(57.1%)と最も多かった。また、セミナーの内容は、「どちらかといえば難しかった」と回答した者が5名(71.4%)と最も多かったが、一方で「今後の仕事に活かせると思う」も5名(71.4%)と多く、受講者にとって、やや難解ではあったが、有意義なセミナーになった

ようだった。自由記載でも「モニタリングで数値の見方がよくわかりました」等の記載があり、明日からの業務に役立つセミナーとなった。

(6) 患者急変対応「何か変、と思ったとき…」

講師：清水真名美、寺澤涼子、加藤紀子、石井房世
(名古屋市立大学病院・救急看護/集中ケア認定看護師)

日時：平成27年11月15日(日)、9:30~16:30

場所：名古屋市立大学看護学部 西棟講義室A、演習室A, E, F, G

募集人数：20名

参加者：19名

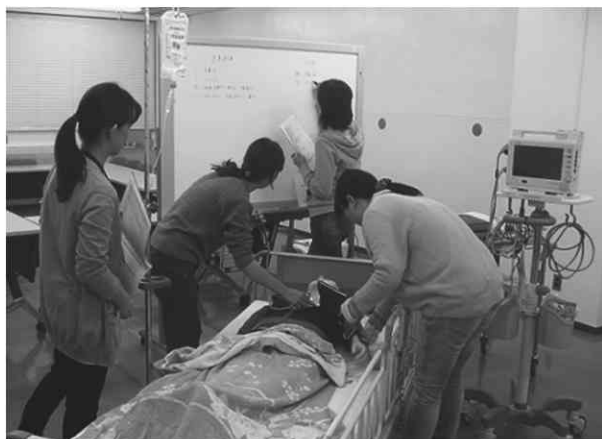
参加費：3,000円

〈内 容〉

このセミナーでは受講生が患者急変に気づき、医師などに報告できることを目的とした。患者急変対応コース for Nurses ガイドブックによれば、「急変とは、予測を超えた状態の変化をいい、その程度は観察者の予測範囲によって異なる。一般にはその変化の方向性は、病態(症状)の悪化を意味し、何らかの医療処置を必要とする場合を表現している」と定義されている。私たち看護師が急変を見逃さないようにするためには、患者の病態変化に気づき、急変対応の必要性を判断する能力、そして、医師などに迅速かつ適切に報告する能力が求められる。

しかし、急変はいつ起こるか分からないため、常日頃から急変に備えて観察する能力が必要であり、患者と接する時には、常に第一印象の観察を心がけることが大切である。第一印象とは、「最初に出会った数秒間で、外見全体を視覚と聴覚を使って、アセスメントする」ことである。そこで必要なことは、アセスメントを行い、「死に結びつく可能性のある危険な兆候」があるのかどうかを判断することである。アセスメントの結果、心肺停止状態と判断した場合、BLSを実施する。心肺停止状態ではないが、危険な兆候があると判断した場合、ナースコールで応援要請を行いながら、さらに詳しく患者の状態を把握するために一次評価を行っていく。一次評価では、簡単な器具(血圧計・モニタ・パルスオキシメータ)と触診・聴診で、命を支える「A：気道」「B：呼吸」「C：循環」「D：意識」「E：外表」に問題がないか素早く観察を行う。すなわち、患者が心停止にどの程度近づいているかを判断するために、「A・B・C・D・E」の視点で評価するのである。そして、患者の状態を観察しながら、患者に何が起きているのかアセスメントを行い、SBARを用いた報告を医師などに行う。

これらの方法を知り、実践できるようになるために、



まず観察のポイントや観察方法を講義で学んだ後、机上シミュレーションを行い、講義内容の理解を深めてもらった。そして、実働シミュレーションで人形を使用し、学んだ内容を実践してもらうという段階を経て学習するセミナーとした。

〈アンケート結果〉

参加者19名全員から回答があった（回収率100%）。セミナーを知ったきっかけは「チラシ」9名（47.4%）、「職場の上司の勧め」8名（42.1%）、参加動機は「自分自身のレベル・アップ」が14名（73.7%）と最も多かった。また、セミナーの内容は、19名全員が「わかりやすかった」、「今後の仕事に活かすことができる」と回答し、非常に好評であった。自由記載でも「病棟で起こりそうな実例を取り上げていたため、イメージがしやすかった」、「今後現場で急変にあたったら、今日学んだことを活かしていきたい」等の記載があり、明日から現場で活用できる多くのことが学べたセミナーとなった。

3) 全体を通しての今後の課題

今年度も、6件のセミナー全てが受講生から高い評価を受けており、看護職のニーズに合致した有意義なセミナーの開催となった。今後も引き続き同様のテーマを中心に、受講生の要望も取り入れながらセミナーのテーマを決定していく。また、今年度も、申込をしたにもかかわらず、1回の出席もなく、受講料の徴収ができなかったケースが各セミナー数件あり、今後の課題である。事務手続き上、開催前（受講決定時点）の受講料徴収が難しいため、対策は困難であるが、開催日近くにセミナー開催の連絡を再度する等、欠席者を減らす方法を検討していく必要がある。

2. なごや看護生涯学習公開講演会

担当：脇本寛子、山口孝子、友廣智香

「なごや看護生涯学習公開講演会」は、地域の保健医

療職者が求めている知識、情報、話題などを提供し、結果として市民の皆様に提供する医療の質向上に貢献することを目的としている。その時々での医療情勢をふまえてテーマを選定し、その分野で活躍中の講師を招聘し、毎年1回開催している。今年度は名古屋市立大学開学65周年の記念事業として開催した。

1) 事業実施の経緯

時期	内 容
4月	4/14 公開講演会テーマの提起
5月	5/19 テーマの検討と講師の選定、講師との交渉
6月	スケジュールや参加者の募集方法などの検討
7月	7/16 チラシ案作成、チラシの送付先、印刷枚数の検討
8月	8/12 チラシ原稿の最終確認、1,800部発注 8/13 募集告知を看護実践研究センターホームページと全学ホームページで開始、名古屋市内の病院および老人保健施設、愛知県内の保健所などへのチラシ発送 FAXとメール（名古屋市電子申請サービス）による応募受付開始
9月	9/7 看板・垂幕の検討 9/18 入試広報課へプレスリリース依頼
10月	10/9 参加申し込み状況、当日スケジュール・役割分担、アンケートの確認、講師謝金・交通費・会議費・会場使用の申請、講師への最終確認の書類発送手続き
11月	11/19 名古屋教育医療記者会と名古屋市政記者クラブへのプレスリリース 11/20 参加申し込み状況、当日のスケジュール・役割分担の最終確認

2) 事業の実施状況

テマ：地域包括ケアシステムの構築 ～医療看護介護福祉の連携から地域づくりへ～

講師：高橋紘士（一般財団法人高齢者住宅財団・理事長）

日時：平成27年12月11日（金）18：00～19：30

場所：名古屋市立大学さくら講堂

参加費：500円

参加者：104名（講演会関係者含む）

〈内 容〉

わが国では、住み慣れた地域で、自分らしい暮らしを人生の最期まで続けることが出来るよう、地域の包括的な支援・サービス提供体制（地域包括ケアシステム）の構築が推進されている。地域包括ケアシステムに関する議論は、当初は介護保険のあり方から出発しているが、現在は医療介護の連携が焦点となっている。



ご講演では、地域の中で家族の絆を大切にしたいケアの推進、多職種による連携、ホームホスピスの具体的な取り組みなどを具体的にご紹介いただき、地域包括ケアシステムの構築に向けた地域づくりを考える貴重な機会となった。

3) 参加者アンケート結果

参加者90名のうち、81名から回答があった（回収率90.0%）。参加者の多くは看護師（65名80.2%）であったが、保健師、医師、ケアマネージャー、医療ソーシャルワーカー、ケースワーカー、事務職員、教員と多職種が参加していた。講演内容が「わかりやすかった」もしくは「どちらかといえば分かりやすかった」と答えた人は55人（67.9%）であった。以下に参加者の感想の一部を掲載する。

- ・資料に沿ってただ話すのではなく、とてもよかった。聞いたことから自分から学びたいことがいろいろあり、これからさらに興味関心が持てて発展していけそう。
- ・患者の住まいとレベルアップを考えながら、仕事ができるよう努力していきたい。
- ・患者の家族や本人にどのような終末を迎えたいのか、役立つ知識が多かった。

4) 課 題

本年度の開催時期、時間、運営については、特に問題はなかった。今回は、名古屋市内に留まらず愛知県内に幅広く広報を行ったが、参加者の所属施設は、名古屋市が79人（97.5%）と多数であった。アンケートによると講演会についての希望は、「認知症ケア」31人（38.3%）、「退院支援」26人（32.1%）、「倫理問題」19人（23.5%）、「メンタルヘルス」18人（22.2%）であり、来年度の参考とする。

3. 地域連携セミナー

担当：宮城純子、安東由香子

「地域連携セミナー」は、保険医療福祉関連職種の方々や市民の皆様と連携して取り組むべき社会的な問題を取り上げている。さまざまな立場の人々が一緒に考えることで、解決の糸口や新たな方策の発見につながることを期待している事業である。

1) 事業実施の経緯

時期	内 容
1月	テーマと講師の選定、講師との交渉 1/20 講師およびテーマ決定
2月	2/27 広報なごや5月号への掲載依頼
3月	チラシ（案）、配布先などの検討 3/13 会場予約
4月	4/ 8 チラシ印刷1200部発注 4/23 名古屋市内の病院および保健所・老人ホームなどへのチラシ発送 看護実践研究センターホームページ・全学部ホームページで募集告知 4/28 入試広報課へのプレスリリース依頼 Faxとインターネットで応募受付、Faxとメールで参加の可否連絡
5月	5/ 8 講師への当日資料等の最終連絡 5/19 当日配布用のアンケート内容・看板の検討 5/21 名古屋教育医療記者会、名古屋市政クラブへのプレスリリース
6月	6/17 準備状況、参加申し込み状況、当日スケジュール・役割分担の最終確認 6/23 事前受付リスト作成開始、事務への領収書発行手続き依頼、配布資料とアンケートの印刷

2) 事業の実施状況

テ ー マ：高齢者と共に生きる社会 ～認知症や高齢者虐待に地域で取り組むために～

講 師：高見靖雄氏（東浦町高齢者相談支援センター）

日 時：平成27年7月4日（土） 13：00～15：00

場 所：名古屋市立大学看護学部308講義室

参 加 費：500円

参 加 者：90名（講演会関係者含む）

〈内 容〉

昨今、わが国では高齢者の増加と共に、認知症や高齢者虐待が増加してきており、高齢者虐待は施設のみならず、家庭内でも年々増加傾向にある。認知症や高齢者であっても、安心できる場所で人として尊重され生活して



いくためには、地域で見守る姿勢が必要とされている。今回、愛知県東浦町で実際に認知症者や高齢者、そのご家族に携われ、社会福祉士、介護支援員のお立場で活躍されている高見氏をお迎えし、ご講演いただいた。

ご講演では、まず認知症や高齢者虐待に地域で取り組むために、高齢者虐待ネットワークの必要性と運用について具体的にご紹介いただいた。次に高齢者虐待対応の基本姿勢、虐待に当たるか否かの判断、望ましい判断について、映像やグループワークを用いて紹介された。講演後には参加者からたくさん質問があり、重要なテーマであると再確認された機会であった。

3) 参加者アンケート結果

参加者83名のうち、81名から回答があった（回収率97.6%）。参加者の多くは看護職（44名54.3%）であったが、介護福祉士、ケアマネージャーも参加していた。参加動機は「興味関心があった」と答えた人は35人（43.2%）であり、「新しい知識を得る」28名（34.6%）であった。以下に参加者の感想の一部を掲載する。

- ・地域生活支援センターの行政がどのように動くかわかりやすかった。
- ・高齢者社会に向け、高齢者の受診も増えてくる中で、今まで虐待にはあまり関心を向けてこなかったが、今後はそれを踏まえていこうと思う。
- ・虐待対応をしてしまう家族の気持ちを理解して仕事ができそうです。

4) 課 題

本年度の開催時期、時間、運営については、特に問題はなかった。参加者のアンケートによると講演会についての希望は、「認知症ケア」「退院支援」「メンタルヘルス」であり、来年度の参考とする。市民の皆様や保健医療福祉関連で働く皆様が何を求めているのか、頂いた意見を基に反映できるようにテーマを企画していく必要がある。

4. 昭和生涯学習センター共催講座

担当：宮城純子、安東由香子

「昭和生涯学習センター共催講座」は、昭和区との共催で行っている事業である。市民は大学という普段入ることの出来ない場で、専門的で先進的なことを低額で学ぶことができ、大学としては、学生以外にも学びを提供するという地域貢献ができる事業である。

1) 事業実施の経緯

時期	内 容
5月	生涯学習センター担当者との講座開催方法についての確認
6月	テーマ・講師の選定と講座運営に関する役割確認（主に、生涯学習センターが広報、募集、受付などの事務を担当、本学は講師選定と会場提供を担当）
7月	テーマ決定、講師との交渉・確定 生涯学習センターによる講師への公文書発行、広報、募集開始
1月	生涯学習センター担当者と共に講演会場の最終確認



2) 事業の実施内容

全5回開催講座で毎週水曜10:00～12:00に開催した。第1回は、公開講座であったが第2回目以降応募者86人から36人を選定した。

回	時期	内 容 / 講 師
1	2/3	ポジティブな心の大切さ ～心と病気の深い関係～ 名古屋市立大学大学院医学研究科 神谷武教授
2	2/10	笑顔で心をポジティブに ～表情と心の深い関係～ 名古屋市立大学看護学部 池田由紀准教授

回	時期	内 容 / 講 師
3	2/17	「腹が立たない」ヒケツ ～見方が変わると心が変わる①～ 名古屋市立大学看護学部 香月富士日教授
4	2/24	「悲しくならない」ヒケツ ～見方が変わると心が変わる②～ 名古屋市立大学看護学部 宮城純子准教授
5	3/2	今こそ夢をもとう ～健康寿命を伸ばすポジティブな心～ 名古屋市立大学看護学部 池田由紀准教授

3) 今後の課題

早期より生涯学習センター担当者との講座内容の検討、大学との共催講座でしかできないような講座企画を検討する。

5. 看護研究サポート

担当：金子さゆり、水野千枝子

「看護研究サポート」は、看護職者が個人またはグループで行う看護研究に対して、看護学部の教員がそのプロセスや研究成果の発表を支援することを目的としている。臨床の場にフィードバックできる、科学的根拠に基づいた看護研究の推進を通して、よりよい看護の提供に貢献することを目指している事業である。

1) 事業実施の経緯

【平成26年度 後期開始 看護研究サポート】新規2件

時期	内 容
9月	看護研究サポート実績報告書の提出依頼
11月	看護研究サポート実績報告 →2件とも継続サポートとなる（平成28年9月 末まで）

【平成27年度 前期開始 看護研究サポート】

新規7件＋継続1件

時期	内 容
4月	研究チームの募集開始（案内の発送、ホームページへの掲載）
5月	研究チームの募集締切 サポート教員の募集開始
6月	サポート教員の募集締切 研究チームとサポート教員のマッチング 研究サポート開始
12月	サポート状況の中間報告
2月	看護研究サポート実績報告書の提出依頼
3月	看護研究サポート実績報告

2) 事業の実施状況

今年度より、研究チームの応募数を確保できるよう、応募チラシの配布先を名古屋市内の病院と保健所へと拡大し、また、看護実践研究センターのホームページに掲載するなど幅広く周知募集した。

今年度サポートした研究は、全部で9件であった（平成26年度後期開始；2件、平成27年度前期開始；新規7件、継続1件）。平成27年度前期分に応募されたチーム全てをサポートの対象とし、平成27年度後期分の募集はしなかった。9件中、名古屋市立大学病院所属が6件であり、3件が外部の病院であった。外部の病院のうち1件は受講生の都合によりサポートが取り止めとなった。

研究テーマは、基礎領域、クリティカルケア領域、慢性領域、高齢者領域、看護管理領域など様々であり、専門領域あるいは研究テーマから指導可能な教員にサポートを依頼し担当していただいた。サポート教員は8名であり、1教員が1～2テーマを担当した。

研究サポートの内容は、研究計画書や質問紙の作成、倫理審査提出のための準備、データ分析方法、学会発表のための研究結果のまとめ方などであった。1年間で5回程度のサポートとしているが、外部の病院については途中から連絡が取れない状態となることがあり、サポートが1～2回で終了するケースもあった。一方、直接の対面指導に加えて、メールや電話でのサポートを複数回行ったケースもあった。指導時間については、開始時間が夕方以降となってしまう場合が多く、1回あたりの指導時間も制限がないため、サポート教員にかかる負担が大きいとの意見がきかれた。

費用については、昨年と同様、受講料として1万円を徴収した。

3) 課 題

例年と同じく、外部の病院のサポートにおいて「研究チームからの連絡が長期間、途絶える」という意見があった。来年度は募集時に希望するサポート時期および内容などの年間計画を提示していただくなどの工夫が必要である。

サポートを希望される研究テーマは様々であり、研究テーマの内容から指導教員の専門性を生かして研究チームとサポート教員のマッチングを行ったが、特定の教員へ負担がかかってしまったため、指導可能な教員の選定が今後の課題となる。また、サポート回数（年間計画）、サポートの開始時間や1回あたりの指導時間（60～90分）、メールや電話での指導など、サポートを受ける上での注意事項を研究チームに周知していく必要がある。

Ⅲ 今後の課題

名古屋市立大学看護学部と名古屋市立大学病院看護部が協働し、看護職者をはじめとする保健医療福祉の専門職者や市民の方々を対象とする地域貢献事業を開始して10年の節目を迎えた。各事業の本年度実績は既述の通りであり、例年と同程度の参加者数であった。アンケート結果でも高い評価を得ており、本センターが実施する地域貢献事業は定着しつつあるといえる。また、本報告書では触れていないが、看護学部の委員会組織の変更に伴い、本センターは本年度から名古屋市立大学看護学部紀要の編集を担当することとなった。これにより看護学部教員が行う研究を把握することができた。

一方、名古屋市立大学は、昨年度の「名市大未来プラン」に続いて、本年度は各部局の未来プランを策定した。看護学部の未来プランは、本年度の紀要に掲載されている通りであるが、その中で本センターは、「プランⅡ（研究）」および「プランⅢ（社会貢献）」において、中心的な役割を果たすことが求められている。すなわち、本年度の実績と課題をふまえて地域貢献事業を拡充することと、看護職員や他の専門領域の研究者との共同研究を推進することが期待されている。

さらに、平成29年度末までに名古屋市立大学看護学会（仮称）の設立と学会誌の発刊も計画されている。前者については、看護学部教員・大学院修了者・大学病院や市が設置する保健医療福祉機関の看護職者らの研究発表と学修の場となるよう企画する予定である。後者については、現行の看護学部紀要を学会誌に改める予定であり、掲載論文の質が問われることとなる。いずれにおいても、研究活動の推進が不可欠であり、研究に関する学修機会の増加や講演会などの開催が望まれる。また、平成28年度中に学会設立と学会誌発刊の準備に向けた小委員会を発足させて、未来プランの実現を目指したいと考えている。